

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

逆境をチャンスに！ 人・花・そば・ホタル…、様々な地域資源と地域一丸のむらおこし

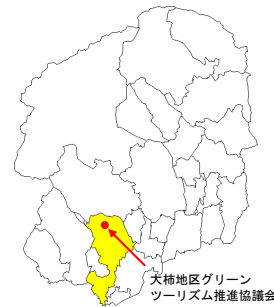
受賞者 ^{おおがきちく}大柿地区グリーンツーリズム推進協議会
(^{とちぎけん}とちぎ ^{しつがまち}しつがまち 栃木県栃木市都賀町)

■ 地域の沿革と概要

栃木市は、東京から約70km、総面積331.57km²、人口約162,000人（平成26年4月現在）。栃木県の南部に位置し、茨城、栃木、群馬、埼玉の4県の県境が近接する地域である。

西には^{みかもやま}三嵯山、^{おおひらさん}太平山、南には^{わたらせ}渡良瀬遊水地などのシンボリックな自然景観と、^{わたらせがわ}渡良瀬川、^{おもいがわ}思川などの豊かな水資源を有している。また、北東部から南東部にかけては関東平野に連なる平坦地が広がり、県内有数の農業地帯でもある。

第1図 位置図



注：白地図KerMapの地図画像を編集

国土地理院承認 平14認第 第149号

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大柿地区は栃木市の北部に位置し、東西に通る国道293号と南北に通る県道37号栃木栗野線の交差点付近から一級河川逆川に沿って集落が広がり、周囲を丘陵に囲まれた中山間地域特有の景観を有する。大柿地区からは国道293号を通じて東に北関東自動車道都賀インターチェンジ、西に東北自動車道栃木インターチェンジがそれぞれ6～8kmの近距離に位置するほか、南北に通る県道37号により栃木市と旧栗野町市街へ通じており、交通の至便な地域である。

大柿地区では、農家のほとんどは第2種兼業農家であり、稲作を主体として野菜（露地・施設）、花き、花木などが栽培されている。農業従事者の高齢化、鳥獣被害の増加などに伴い、遊休農地は増加傾向にある。

第1表 地区の概要（大柿地区）

事 項	内 容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	10.2% 総世帯数 4,195戸 総農家数 426戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 71戸 1種兼業農家 34戸 2種兼業農家 227戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 1,898ha 耕地面積 528ha 田 480ha 畑 47ha 耕地率 27.8% 農家一戸当たり耕地面積 1.2ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

大柿地区では、過疎化と高齢化によって遊休農地や空き家の増加が目立ち始めてきた昭和50年代、人口減少に伴って大柿小学校の統廃合が旧都賀町から提起された。

大柿地区には古くから寺、神社及び学校が1つずつあり、竜興寺、白山神社、大柿小学校が地元住民にとって心の拠り所であった。その一つである大柿小学校が無くなる方針が示されたことにより、住民の将来に対する不安は高まっていった。大柿地区における反対運動はテレビでも報じられるほどであったが、結局は廃校の流れを変えることはできず、大柿地区の住民は心の拠り所の一つを失い、将来への絶望感を初めて感じるようになった。

心の拠り所、地域の拠り所を失いたくないという住民の思いは、廃校舎の存続活動へとつながり、大柿地区においてグリーン・ツーリズムを推進するための活動拠点である大柿コミュニティセンターが整備されることとなった。

イ むらづくりについての合意形成

過疎化と高齢化の進行、遊休農地の増加に加え、大柿小学校の廃校により大柿地区において住民の将来への不安が高まる中、農業生産基盤の整備が急務であるとして圃場整備の気運が高まり、地域住民の心は再び一つにまとまっていった。

大柿地区では、昭和60年度から平成14年度にかけて実施された3地区の圃場整備事業、平成8年から実施された県単むらづくり事業、林業構造改善事業により、「カタクリの里」の公園、「大柿コミュニティセンター」、「都賀生出宿里の駅」（農産物直売所・農村レストラン）や隣接するトイレが整備され、農業生産基盤や生活環境が大きく改善した。

そのような中、安生孝章氏は小学校統廃合に反対した仲間を中心に、有志7名で酒を酌み交わしながら、もっと多くの人を呼び込んで大柿地区を盛り上げていこうと意見が一致した。まずは、そば通の間では美味しいと有名な大柿のそばを食べてもらおうと、「そば祭り」の実施が決まった。7名がそれぞれ2万円ずつ資金を出し合い、模擬店やフリーマーケットを開くこととした。これが後のむらおこしの中核組織「大柿に“ちょっと恋”の会」へと発展していく。そしてスポンサーを募りチラシを作成し、都賀町民に呼びかけ、多くの来場者を得て「そば祭り」は行われ、大柿地区のむらおこしがスタートした。

ウ 現在に至るまでの経過等

平成19年には、大柿地区に群生するカタクリを多くの人々に見てもら

う「花祭り」が始まった。そのほか、ホタル狩りに訪れる人々をもてなすことから始めた「ホタルまつり」は、毎年の恒例行事となり、お祭りを契機に大柿地区を訪れる人は増えていった。

このように地域の食や自然環境を活かした様々な地域活動を展開していた矢先、平成23年3月に東日本大震災が発生した。幸いにも大柿地区は地震による直接の被災は免れたものの、原発事故による風評被害にさらされ、順調に売上げを伸ばしていた「都賀生出宿里の駅」の農産物直売所の販売額が、大震災前（平成22年度）の1億100万円から、8,700万円（平成23年度）に急激に落ち込んだ。これに加えて野生鳥獣による農作物被害が年々増加し、農家の営農意欲の低下、少子高齢化による地域の担い手の減少等の課題も抱えており、この難局を開くためにはどうしたらよいか、地域住民が話し合いを重ねた。そして、平成24年9月、有志や自治会などが一同に揃って「大柿地区グリーンツーリズム推進協議会」（以下「推進協議会」という。）を設立した。

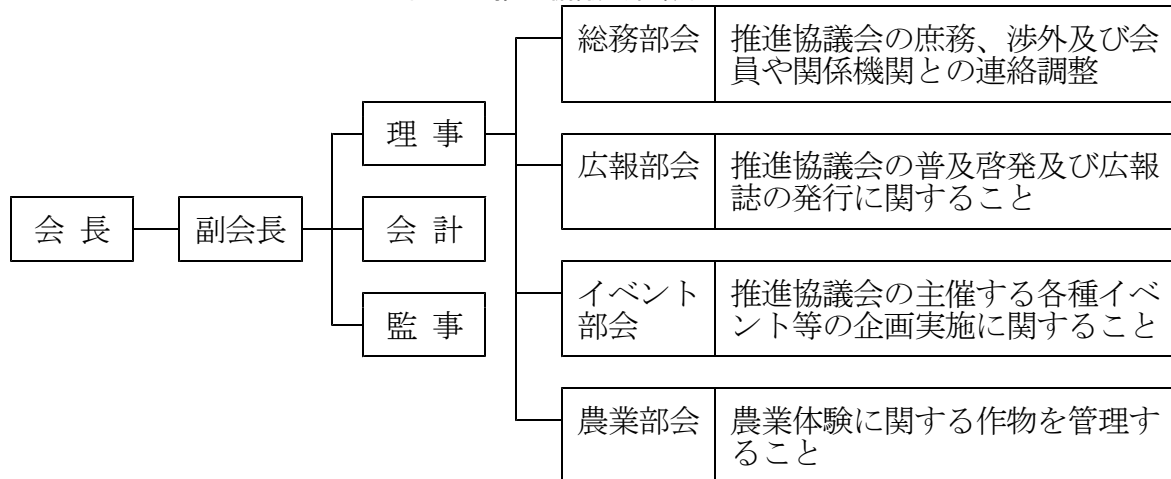
推進協議会は、構成員となった「NPO法人自然史データバンクアニマnet」（以下「NPO法人アニマnet」という。）を中心とする小学生を対象とした自然学習体験活動や、とちぎ夢大地応援団カレッジ活動による大学生との交流に取り組んでいる。また、都賀生出宿里の駅と連携した「そば祭り」や「ホタルまつり」の開催や、構成団体が中心となった鳥獣被害防止対策の推進により農家が安心して生産と出荷をすることできる環境が整備された。その結果、都賀生出宿里の駅の農産物直売所における平成26年度の販売額は9,900万円まで回復しており、1億円の大台も視野に入っている。

（２）むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

推進協議会は、個人会員66名と団体会員18団体により構成されている。推進協議会では、おおむね2か月に1回程度の役員会を開催し、各種事業の推進について検討を行っている。構成団体等が行う多面的機能支払制度、とちぎ夢大地応援団（県事業）、里山林整備事業、自然体験学習等については地域の総意として取り組み、推進協議会は大柿地区におけるグリーン・ツーリズムを推進する司令塔となっている。

図 1 推進協議会組織図



団体会員（構成団体）

No.	団 体 名	取 組 内 容
1	J A しもつけ都賀生出宿里の 駅農産物直売部会	都賀生出宿里の駅農産物直売所に地域農産物を供給
2	J A しもつけ都賀地区女性会 「ふる里会」	都賀生出宿里の駅の専属加工グループとして、地域農産物の加工品を製造
3	大柿の郷をまもる会	多面的機能支払制度に取り組む
4	大柿村はたるの里より処	農産物直売所、農村レストランを運営
5	中郷そばグループ	集落営農組織。構成員8名で12戸からそば栽培受託
6	N P O 法人 ふるさと	里山林整備など、地域環境保全に取り組む
7	大柿に“ちょっと恋”の会	大柿地区のむらづくり活動の中心的組織
8	都賀町ホテルの会	逆川にホテルを呼び戻そうと養殖活動に取り組んだ
9 ～ 14	大柿地区6自治会（宿坪、南嶺、中坪、十文字、野上、中郷）	自治会長が推進協議会役員となり推進協議会との連携調整する
15	大柿十文字西地区土地利用研究会	大柿地区内の宅地分譲地の権利調整
16	大柿柿の会	各戸で収穫される柿を干し柿などにして活用する
17	大柿鳥獣管理士会	大柿地区で鳥獣対策の指導を行う。鳥獣管理士2名
18	N P O 法人自然史データバンクアニ マ n e t	栃木市内の小学生を対象に、大柿地区で自然学習体験活動や有機農業などを展開

イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

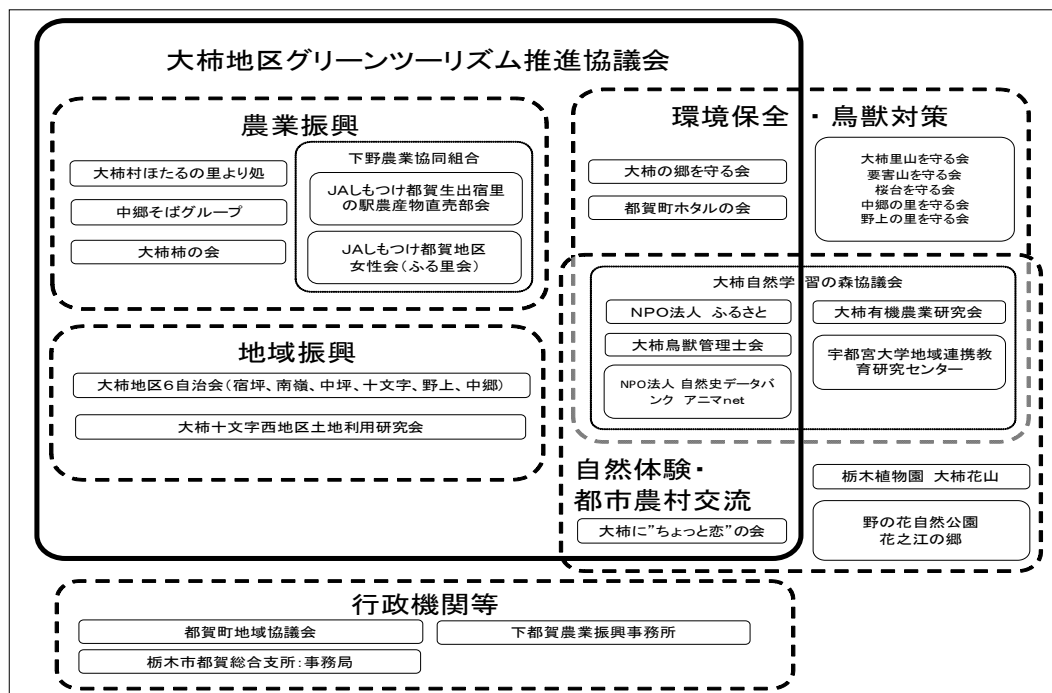
① 連携団体

No.	団 体 名	取 組 内 容
1	栃木植物園大柿花山	花木を主体とした民間植物園
2	野の花自然公園花之江の郷	山野草を主体とした民間植物園。レストランを併設。
3	大柿自然学習の森協議会	NPO法人アニマnet、NPO法人ふるさと、大柿有機農業研究会、大柿鳥獣管理士会、高橋准教授（宇都宮大学地域連携教育研究センター）で構成。大柿地区を自然学習の森として活用を目指す
4	大柿里山を守る会、要害山を守る会、桜台を守る会、中郷の里を守る会、野上の里を守る会	森林・山村多面的機能発揮対策交付金を活用して、大柿地区の里山林保全や里山林空間を活用した自然学習体験活動（NPO法人アニマnetが担う）などを行う。
5	大柿有機農業研究会	NPO法人アニマnetと共に子どもたちに有機農業体験を提供

② 指導・支援機関

No.	団 体 名	取 組 内 容
1	都賀町地域協議会 H27から地域会議に移行	栃木市との合併を機に行政主導で設立され、新栃木市の市政に対する旧都賀町地域の要望を取りまとめ
2	栃木市都賀総合支所	大柿地区グリーンツーリズム推進協議会事務局を担う
3	栃木県下都賀農業振興事務所	むらづくりに関する情報提供や補助事業等の紹介
4	下野農業協同組合（JAしもつけ）	都賀生出宿里の駅の管理運営を行う

第1図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

推進協議会の設立に当たって、大柿地区の6つの自治会が構成団体になったことにより、全構成員の中にむらおこしの当事者であるという意識が芽生え、連携した活動が行われている。

「そば祭り」や「ホタルまつり」については、地域全体で取り組む機運が高まっているほか、大柿地区の農村地域を地域外の方にもっと楽しんでもらう取組として、ジャガイモ、さつまいも、落花生、ショウガ等の収穫体験や調理体験、そばをはじめとする農産物のオーナー制度の導入など新たな都市農村交流にもチャレンジしている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 当該集団等の農林漁業生産、流通面の活動状況

ア 農産物直売所や農村レストランによる農業所得の向上

平成9年、国道293号バイパスに面して農産物直売所と農村レストランの一体型施設「都賀生出宿里の駅」が完成した。推進協議会は、構成員の都賀町農業協同組合（現JAしもつけ）が都賀生出宿里の駅の運営を引き受けたことを契機として、新たに農産物直売部会と女性会加工部「ふる里会」を発足した。



写真1 都賀生出宿里の駅

生産者の顔写真付きのラベルを活用した直売は、利用者の評価が高く、農産物直売所の販売額は、平成9年度の2,200万円から平成18年度には1億100万円まで伸び、利用者も平成21年度には9万9,000人に達した。

しかし、東日本大震災に伴う原発事故の風評被害により、平成23年度の販売額が8,700万円に落ち込んだ。

これを機に推進協議会が設立され、「大柿ホタルまつり」や「大柿新そば祭り」との連携による農産物の販売を促進するためのPR活動や、鳥獣被害防止対策による農家が安心して生産と出荷ができる環境整備などにより、平成26年度の販売額は9,900万円まで回復している。

農村レストランでは地域で生産されたそばやうどんを提供しており、平成27年2月に「とちぎの地産地消推進店」の認証を受け、集客に一役買っている。

イ 柿の里づくり

柿を利用して大柿地区を盛り上げるため、平成16年に地元自治会が地区の全戸に対して柿の苗木を2本ずつ配布した。その後、大柿柿の会が

中心となって干し柿等地域の特産品を開発しており、「大柿村ほたるの里より処」において「柿ソフトクリーム」の販売が始まった。今後は、干し柿オーナー制度の取組に向けた検討を行うこととしている。

（２）当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

ア 鳥獣被害対策の推進

遊休農地の増加とともに野生鳥獣による農作物被害が増加し、農家の営農意欲の低下が懸念されていた。さらに、大柿地区では農地以上に山林の荒廃が目立っていた。このため、里山の保全と鳥獣被害の防止を目的としてNPO法人ふるさとが里山林整備事業に取り組み、山林の低木の伐採や下草刈りに多くの地域住民が参加している。

現在、推進協議会の構成団体となった大柿鳥獣管理士会の支援を受け、地域全体で森林・山村多面的機能発揮対策などの鳥獣被害対策に取り組み、農家が安心して生産・出荷できる環境が整いつつある。

イ そばの作付けによる遊休農地の解消

大柿地区で生産されるそばは、品質が良くおいしいと評価され、高値で取引されている。このため、中郷そばグループなどが遊休農地を積極的に活用し、約10haの農地でそばの栽培を行っている。収穫されたそばは、主に大柿地区内の２か所の農村レストランで供されるほか、直売所においてそば粉として販売されている。

ウ 自然環境の保全活動（とちぎ夢大地応援団活動の展開）

特に生産条件の悪い山あいの農地や山林を自然体験などに活用するため、推進協議会を設立した平成24年度から県の事業である「とちぎ夢大地応援団」に取り組み、耕作放棄地の復旧や遊歩道の設置を行っている。この事業は、中山間地域においてボランティアを行いたい都市住民を地域が受け入れ、環境整備を共に行うものである。

平成26年度は、復旧した農地を子供たちの農業体験に活用したほか、栃木市に隣接する鹿沼市内の企業と連携して農地と山林の清掃活動、遊歩道の整備等を行い、自然学習の森の整備を進めている。遊歩道沿いでは彼岸花の移植を行っており、彼岸花の里づくりの取組に発展している。

（３）当該集団等の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等

ア 後継者の育成

大柿地区の６つの自治会が推進協議会の構成員となったことで、むらづくりに向けた取組が地域住民間で共有されており、近年ではイベントなどを手伝う地元の若者が増えており、過疎化と高齢化が進む中でも

将来に向けた明るい兆しが見られる。

今後は、地域の若者を新たな推進協議会の会員として迎え入れ、組織立った部会活動を展開しつつ、後継者としてスキルアップを図ることとしている。

イ JA女性会の活躍、都賀生出宿里の駅

JAしもつけ都賀地区女性会「ふる里会」は、地域農産物を使った手打ちそば、うどん、まんじゅう、米粉パン、トマトゼリー等の加工品を主に都賀生出宿里の駅で提供している。特にいちご大福「おとめのはじらい」は人気商品であり、推進協議会では大柿地区にちなむ新商品の開発を目指している。



写真2 おとめのはじらい

また、都賀生出宿里の駅で働いている6名の女性は、そば祭りなど地域イベントの際に大柿地区のコンシェルジュとして大柿地区への来訪者を温かく迎えている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 当該集団等の地域資源整備による生活・環境整備面の取組状況

ア 大柿カタクリの里の整備

都賀生出宿里の駅の西側に位置する小高い山には、春先にカタクリの花が咲き誇る群生地が存在している。地域住民のカタクリを地域活性化に役立たせたいとの思いがカタクリ群生地の山林所有者の心を動かし、遊歩道やトイレなどの整備が進められ、カタクリ群生地の保護につながっている。カタクリの花が咲き乱れる3月下旬から4月上旬までは首都圏からの来訪者も多く、都賀生出宿里の駅における売上げの向上にもつながっている。

イ 彼岸花の里の整備（大学との連携）

彼岸花の群落を更に広げて大柿地区を彼岸花で彩りたいという住民の思いを実現するため、平成26年度に県の事業である「とちぎ夢大地応援団活動」を活用し、夏には足利短期大学の大学生と連携し旧国道293号沿いに、秋は農地保全ボランティアの応援で大柿コミュニティセンター周辺に彼岸花の移植を行った。

平成27年度からは、大柿地区全域において、彼岸花の移植に取り組み、彼岸花を新たな地域資源として都市住民との交流につなげることとしている。



写真3 移植した彼岸花の群落

(2) 当該集団等のコミュニティ活動の強化、都市住民との交流活動による生活条件の改善・整備への寄与状況

ア 美しい花の季節

大柿地区では、春に数多くの花々が咲き誇る。周囲の丘陵地はもちろん、カタクリの里をはじめ、推進協議会の連携団体が運営する「大柿花山」や「花之江の郷」においても、春の花木や山野草が楽しめる。毎年春には、多くの人々が花を見るために大柿地区を訪れるようになり、花祭りから始まった来訪者へのおもてなしは、植物園や農産物直売所、農村レストランなどに受け継がれている。

イ 多くの人が集うホタルまつり

ホタルまつりは、「大柿に“ちょっと恋”の会」がホタル狩りに訪れる人々をもてなすために取り組み始めた大柿地区の主要行事であり、現在は推進協議会が主催者となっている。ホタルまつりでは、宿坪公民館で協議会が提供するそばが食べられるほか、大柿地区の重要な生活道である旧国道293号の逆川付近を歩行者天国にして、構成団体の模擬店が



写真4 ホタルまつりののにぎわい

建ち並ぶ。多くの人が集まるホタルまつりは、ホタル観賞だけでなく大柿地区の自然や農産物が楽しめる場となっている。

ウ グリーン・ツーリズムによる誘客促進～そばを活かし、地域の農業にも触れてもらう～

平成18年に開始したそば祭りから、そばは大柿地区の行事に欠かせない存在である。主催者の推進協議会は、そば以外にも大柿地区を楽しんでもらうため、平成25年度はそばの食べ放題を組み合わせせたジャガイモ掘り体験やさつまいも掘り体験を開始しており、平成26年度にはそば祭

りに約3千人が集まった。

平成27年度は落花生やショウガなどの新たな品目の生産に挑戦し、農産物のオーナー制度を開始している。推進協議会は、大柿地区の出身者に気軽に里帰りしてもらうため、都市住民はもとより地域外に住む大柿地区の出身者に対してオーナー制度への参加を積極的に呼びかけている。



写真5 ジャガイモ掘り体験

エ 自然学習体験活動の展開

地域住民のシンボルであった大柿小学校の廃校を契機に、大柿コミュニティセンターが推進協議会の活動の拠点になっており、推進協議会の構成団体「NPO法人アニマネット」を中心として、栃木市内の小学生と生き物調査隊活動等を行っている。平成26年度には、とちぎ夢大地応援団で復旧した農地において小麦の播種や収穫体験を行うほか、子供たちが自ら収穫した無農薬栽培の小麦を利用してピザを作る機会を提供している。



写真6 小麦の播種体験

現在、大柿コミュニティセンターの裏山と山あいの農地を「自然学習の森」として整備しており、農業体験や自然学習体験の拠点とすることを目指している。

また、平成26年度末から、観光植物園の「大柿花の山」のエリア内において、伐採木などを利用してオープンテラスやテーブル、椅子を自分たちで一から作りあげ、カフェテラス「森カフェ」の完成に向けて取り組んでいる。

(3) 当該集団等の活動による女性の社会参画の促進状況等

推進協議会では、14名の女性会員が活動に取り組んでおり、地域外の4名の女性ボランティアと協力して大柿地区の自然や農業の大切さを子供たちに伝えるため、自然学習体験の指導に奮闘している。

女性たちは、イベントとなると直ちに駆けつけ、能力を存分に発揮して来ていただいた方へのおもてなしを行う頼もしい存在である。

推進協議会では、人を呼び込むための工夫やおもてなしに女性の意見を反映させるなど、協議会の運営に当たって女性の参加を進めている。